

米 書 評

成瀬勝武・青木楠男・村上永一 監修
成瀬泰雄・来島 武 編

世 界 の 橋

書 評 者
平 井 敦*

橋に関する本は数多くあるけれども、この本は専門家のみならず一般の人々をも楽しませてくれる種類のものである。著者らは若き日に欧州に学ぶ機会を持ったが、その折に自らの手で撮影した写真を中心としてこの本が生まれたわけである。来島 武 君は三菱重工業横浜造船所に、成瀬泰雄君は日本鋼管橋梁部に勤務する橋梁設計の第一線の技師である。この書を編まれる機会に、両君は外国ならびにわが国のコンクリートおよび鋼橋について、歴史的にまた構造的にそして造形的に優れたものを選び、その写真に簡単な和英両文の解説を付したものである。なんのへんてつもないように思われがちであるがこれは大変なエネルギーを必要とする仕事である。筆者も一度このような本の上梓を考えてみたが、その計画を放棄したことがある。両君はよく取りまとめられたものと実に感心した次第である。成瀬泰雄君の御尊父、日本大学教授成瀬勝武先生が監修者の一人であり、両君の早稲田大学時代の恩師に当る青木楠男先生も監修されているが、両先生は周知のように日本の橋梁界の大先輩で

あり、また特に橋の歴史には御造詣の深い先生方である。さらに監修者として建設省の橋梁部門の最高責任者の地位にある村上永一土木研究所長も加わってこの本ができたのである。

本書のように、構造力学の分野から離れて、橋全体のイメージを把握し得るような構成をとっている本は実は必要なのである。橋の設計者はその日々の設計に追われ、とかく新鮮さを失った設計に追いこまれがちである。座右にこの一書をそなえておけば、何物かをこの書のなかから汲みとることができるのではなからうか。

また、この本の著者らは意識されていないかも知れないが、中学校や高等学校の生徒さん方にこの書が与える影響も大きいはずである。この書がきっかけで土木技師になったなどという美談が将来聞かれるかも知れない。そのためにも再版の折には、橋の設計とか建設は土木工学の部門が取扱かっているのだということをどこかに明記して頂けないだろうか。巻末に簡単な橋の解説を付して、専門家でない人々もこの書を楽しむことができるように配慮されているのはよいことである。慾をいえば、人目を引く橋のあるページにはその所在を示す略地図を付けて欲しかった。外国人には、錦帯橋が原爆の町広島のすぐ近くにあるなどはほとんど知られていないと思うからである。この種の本は、他にももっとあってよいのではなからうか。つぎは「ダム」などについてこの系統のものを取りまとめることを、どなたか計画されたらいかであろう。本書はアメリカ、スウェーデン等に400部くらいも出て、初版の残部が少なくなり目下再版が計画されていると聞く。これも本書が世にアピールしたことを示す一例と考えられ、昨年の発刊であるがここにすいせんするものである。

* 正会員 工博 東京大学教授

森北出版KK刊, B5判変型・260ページ、定価 4000円

新 刊 目 録

編著訳者名	書 名	判型	ページ数	出 版 社	定 価	記 事
川田 忠樹 著	吊橋の設計と施工	A5	537	理工図書	2500	本書の著者である川田氏は、東京外語大学仏文学科の出身で、その後橋梁に興味を持たれ東大橋梁研究室に研究生として入り工学を学ばれた方である。本書は設計、施工、振動、諸論の4編からなり、巻末に参考資料として、ワイヤーロープの概要、同取扱い方等が付されている。吊橋が脚光をあびているときでもあり、ユニークな書として注目される。
島田・倉西共著	曲り梁の計算式	横B5	329	技報堂	1200	本書は、水平面内で曲がった曲り梁が垂直荷重を受けるときの応力と変形を扱ったものである。但し、弧を含む面内の荷重を受ける曲り梁はアーチであるが、本書はこれを除外してある。また曲線橋の計算に応用できるように、一部を除き数表を付けてある。また、計算式および数表は、できるかぎり多目的に使い、実用計算に乗るよう配慮されているが、著者等も断わっているように、全体をカバーするものではない。しかし、実用性に富む好書といえる。